国書版

島木健作全集

第十巻

島木健作全集

第十巻

国書刊行会版

島木健作全集　第十巻

昭和52年1月20日　印刷
昭和52年1月25日　発行

定価 3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170 東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所 株式会社 国書刊行会
電話 (917)8287(代表) 振替・東京5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第十巻　目次

冬の旅……三
礎……一三九
解題……五四五

監修
稲垣達郎
小林秀雄
中村光夫

編集
大久保典夫
小笠原克
高橋春雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

冬の旅

一

秋庭光吉は長い間の放浪に似た生活を切りあげて鎌倉にはじめて小さな家を構へた。それは彼の結婚と同時でもあつた。彼は三十を一つ過ぎたその年の春、東北生れの女と、これ以上平凡な結婚もあるまいと思はれるやうなありふれた結婚をしたのである。

彼の新しい生活は、彼の平凡な結婚のやうに色彩のないものであつた。新居を構へたものに似つかはしい雰圍氣は、家のなかゝらも彼の人間からも感じられなかつた。毎朝きまつた時間に家を出、十五分ほどあるき、横須賀線へ乘つて東京へ出、夕方またきまつた時間に歸つて來た。つとめさきは經濟雜誌社であつたが、彼は外廻りではなかつた。內にゐて資料をあつかつたり、調査したりする役にあたつてゐたから、人々とあまり口をきくこともなかつたのである。

夕方歸つて來ると妻と二人で貧しい夕餉の膳についた。食後その一日のことを何かかにか話し、妻からは彼女の田舍の話を聞くことをよろこんだ。熱い茶を啜つてとりとめない話を靜かにしてゐるうちに彼の心ははじめて一日の塵から洗はれて生き生きと目ざめてゆくやうであつた。座敷とも書齋ともしてゐる部屋に引き取つて本を讀んだ。彼の讀書は彼の仕事とは直接關係のないものゝ方が多かつた。非現實的な古いロマンの世界に遊ぶといふことさへあつた。何の義務も何の强要もない讀書の世界が、今ごろ自分の前にひらけたといふことを彼は喜んだ。そのやうな境遇といふよりは、そのなかで落ち着けるといふこと、そしてなほ感

情のみづみづしさや未知の世界への知的な興味の若さが失はれてゐないといふ自覺が彼を喜ばしたのである。物狂はしい情熱に憑かれ、病み犬のやうに眼を光らせて知識の世界をさまよふといふ青春期の姿ではなしに、今の自分にみづみづしさや若さがあるといふ自覺はしっとりとした落ち着きでもあつた。それほどに十年の放浪は彼には長かつたのである。苦しいことも多いが、それ相應に色彩のある思ひ出があつてもいいはずの二十代は彼には暗かつたのである。疲れてゐるといふ氣持が强かつた、

彼の小さな家は道路から少し引っ込んだところにただ一軒はなれて立つてゐた。家の裏には竹藪があつて、そのなかの小路を行くと自然に山道に通じるのであつた。山腹には洞窟があつて、上から長く垂れた蔦の葉の間からは、首や腕のとれた石のほとけの像が奥の暗がりにならんでゐるのがのぞかれた。その季節々々に山つゝじや山百合の花が咲く道を登つて行くと、晴れた日には富士がかなり下の方からよく見える見晴らし臺に出るのだつた。

日曜の散歩には彼はよくその山道を傳つて海岸の方へ出るコースをえらんだ。大抵彼は一人であつた。妻のユキはすゝめてもあまり一緒に出たがらなかつた。それは田舍に育つたものゝ自然な性情からであつた。はなやかなものゝない、すべてが淡々しい夫婦生活を、彼女はそのまゝに受けとり、何の疑ひもなくこのやうなものと思ひ込んでゐるらしい、娘の時のまゝのあどけない顏つきであつた。

一

しかしある日、この判でおしたやうに規則立つた光吉の一日に多少の狂ひがあつた。道を彼の家の方へまがらず眞直ぐ行くと、つきあたりは古寺で、その寺のよく響く鐘の音はユキにとつて日暮れの感情を呼びおこすものであつた。日の短い季節には鐘は五時になり、鐘の餘韻が消えてまだどれほどもせぬうちにきつと耳慣れた靴音がきこえる。日が長くなると鐘も一時間おくれて鳴つて、それが鳴り終るころには、彼らの貧しい夕べの食事も始まるか終らうとしてゐるかである。

その日は鐘が鳴つてからのちいつまでたつても光吉は歸らなかつた。ユキは煮炊きしたものゝ冷えるのを氣にしながら、膝の上に縫ひものをひろげて待つた。彼女にとつては結婚後はじめての經驗であつた。道路の方のちよつとした物音にも氣をとられ、何度かだまされてゐるうちに夏に向つてゐる一日は全く暗くなつてしまつた。梅雨が近いころに特有なしめつた眞暗な夜で、蛙の聲だけがやかましかつた。

間もなく光吉が歸つて來た時、彼はひどく疲れたやうな顏をしてゐた。ユキがいつものやうにズボンの皺をのばしズボン吊りにかけようとすると、裾の折つてあるところから砂がパラパラと下へこぼれ落ちた。實際に彼は歩き疲れたのであるらしかつた。

「途中でちよつと寄り道してね。歩きまはつたものだから腹が減つた。」

彼は帶をぐるぐると卷きながらいつものやうな平靜な顏でいつた。

「お鍋をあつためますから、ちよつと待つて下さい。」

ユキは急いで炭をつぎ足したりしてゐた。ガスのないこのあたりは不便であつた。どこへ寄り道して來たかといふことは彼女は訊かなかつた。

光吉は食事を終へるといつものやうに部屋に引きこもつた。が、少しするとまた出て來て、臺所にゐるユキの所へ行つた。

「懐中電燈、どこにあつたかしら？」

ユキはすぐにそれを棚の上から取つて渡した。光吉は押入れの戸をあけ、明りをそこへ持つて行かうとしたのだが、コードが短くてそこまではのびなかつたのだつた。彼は懐中電燈で照しながら押入れの奥へ頭を突っ込んだ。

そこには古雑誌などが積み重ねてあつた。スクラップブックやノートのやうなものも重ねてあつた。原稿紙に字を書いたものが、反古のやうに汚れて片隅に押しつけられてもゐた。

光吉はごそごそ音をさせながらしばらく何かを探してゐた。間もなくそれらの堆積の間から中が厚ぼつたくふくらんだ黄色い大きな袋を二つ取り出した。袋がかぶつてゐる埃をはらつてから彼は机の前へ坐つた。

「原田直助遺稿」と、袋の上には光吉自身の手で書いてある。

それを書いてまだ一年にしかならぬのに、彼は何か遠い氣持で自分の手蹟をながめてゐた。墨のいろは妙に白つぽくかすれたやうに乾いてゐる。埃をかぶるに任せておいた袋の紙は擦れてけば立つてゐる。

見てゐるうちにそれを書いた時の激しい感情が彼のうちによみがへつて來た。埃のなかに埋めてそれを今まで顧みずに來たといふ自分の心が信ぜられぬやうな氣持がして來る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は袋のなかのものを取り出した。それは書かれてゐるものから區別すればいろいろであつた。原稿紙に書いて、きちんと綴ぢてあるものが一番嵩高ではあつたが、そのほかに大學ノートにペンで書いたもの、小學生の使ふやうな雜記帳に鉛筆で書きなぐつたもの、小さな手帳に書いたものなどいろいろであつた。わづか數篇に過ぎなかつたが、活字になつた頁の切り取りもあつてまじつてゐた。

光吉は電氣スタンドを手もとに引き寄せてその明るい光に照らしてそれらの書きものを一つ一つひろげて見た。切れたり續いたりではあるが、それらはほぼ十年の期間にわたつてゐる。十年！　そしてそれは光吉にとつての十年でもあるのだ。それらの生活記錄のどの一つにも彼は思ひをかきたてられずにはゐない。どの頁の陰にも書いた本人と共に光吉の顏もひそんでゐる。十年の生活は形の上では別れてゐることはあつても、心の上ではつねに結び合つてゐた。原田の書いたものは、光吉の書いたもの以上に、光吉の姿をそこに浮き出してゐる。

押入れの奥に、ほかのものの下に押し込んだといふのはむしろそのためであつた。決して信ぜられぬ心からではなかつた。

しかし繰りひろげて行くうちに彼の心は次第に冷靜になつて行つた。彼は今夜これらの書きものをたゞ懷舊の情に驅られてだけ取り出して見たのではなかつた。彼は荒い波風のなかに、正しく生きようとして苦しみもがいた一人の勤勞者の魂が自身によつてどのやうな表現を得てゐるかを見てみようと思つたのだつた。彼は距離をおいて、批評の眼をもつても見なければならなかつた。

「やはり活字にして人に讀ますことのできるやうなものではない。」

光吉は深い溜息と共にさう思はなければならなかつた。

原田といふ人間への記憶を少數の人々のなかにでもとゞめたいといふ願ひを、彼の書き殘したものを活字にすることで果さうといふ光吉の望みは棄てねばならぬものとしか思へなかつた。何事について書いてゐても、原田の表現は十分な客觀性を得てゐるものではなかつた。冷やかに突つぱねていへば、ひとりよがりの空想としかいへぬやうなものもあつた。むしろさういふ表現のなかにこそ、人間の眞實な魂があらはれてゐるといへるやうなものなのだが、それには靜かに耳を澄まして聞くことをしなければならぬ。人々の心のめがますゝあらくなつて行つてゐるやうな、騷々しい世間のなかへそれをおいてみる勇氣は光吉には出なかつた。そんな魂はたやすくはづかしめを受けねばならぬものでもある。はづかしめられることは生きてゐるうちでたくさんであらう。

「やはり彼は人に知られず死んでいつた人間でいゝ。このおれひとりのなかに生きてゐればいゝ。」

さう思ひ定めて見て行つた光吉は、ふと最後の一册を取り上げた時、悽愴な感じに打たれた。それは原田の最後の日までの日記であつた。その最後の日は日づけのみが殘つてゐた。鼠いろのノートの表紙には黑褐色の大きなしみがついてゐた。それは思はず咳き込んで、わきへおしやる間もなかつた時の血の飛沫であつた。

このおれひとりのなかに？　しかし光吉はその鼠いろの表紙のノートを枕もとにおいてゐたころの原田の述懷のなかにことに深く記憶にとどめてゐる一事がある。

三

光吉の歸りがいつになく遲かつたその日は丁度原田の一周忌にあたつてゐた。朝起きた時も電車にゆられて行く時も彼はそれを思ひ出さなかつた。つとめ先でカードを繰つてゐた時、彼はふと今日の日のことを思ひ出した。

歸りに彼はいつものやうに横須賀線には乘らなかつた。彼は川崎で降りて、賑やかな通りをゴミゴミした勞働者の住む街の方へ歩いて行つた。この街を歩くのも彼にとつてはほとんど一年ぶりのことであつた。一年前、原田の死を見送つた日を限り、この地を去つて再び訪ねて來ることもなかつた。

その時まで、光吉は原田と二人で、そのゴミゴミした裏街の家に住んでゐたのである。

しかし二人が一緒に、あるひは離れたとしてもつい眼と鼻のところに住んでゐたのはその裏街がはじめてゞはなかつた。彼らは東北の方の町でも住み、大阪でも住み、最後にこの川崎でも住んだ。たゞどこに住んでも勞働者の街に限られてゐた。

光吉がはじめて原田と知り合つたのは、その東北の方の町でだつた。そのころ光吉は二十歳を少し過ぎたばかりの學生であつた。學生は單に書齋にのみ閉ぢ籠つてゐるべきではないといふ、時の風潮に動かされた一人であつた。學問の研究にしても本の上だけのことではなしに、生きた社會事象を自ら探り、そのなかゝら研究のテーマを見つけ出して行くのでなければならぬといふことを信じた。そして信じた通りを實行した。

ある日彼は、同じやうな氣持である五六人の學生と一緒に、若い指導教授に引率されて、その町にある製鐵所を見學に行つた。

技師が彼らを案内し、いろいろと説明してくれた。巡々にめぐつてある作業場に行つた時に、技師は何か説明する必要から、そこに働いてゐた工員の一人を呼んだ。二人は二口か三口何か話をした。それから技師はまたみんなの方に向いて話をした。技師の態度は好感の持てるものであつた。彼の態度はさつき向ふの事務室の方で會つて來た、勞務や事務の方の長などにくらべて非常に對照的であつた。勞務や事務の人たちは最初からうさん臭さうな眼で學生たちをじろじろと見た。技師の自然科學畑の人らしい冷靜さからは、後輩である若い學生たちがこのやうな生活に對して興味を持ち出して來たことに對して、好意を感じてゐるらしい氣持が傳はつた。彼はどんな感情をもまじへぬ、きはめて自然な態度で、自分の會社の弱點についても話した。常に具體的な物に卽して仕事をしてゐる彼はいつはるといふことはできぬのであつた。

それは火熱爐の前であつた。季節はもう少しで夏の休暇が來るといふ時であつた。前の晩からの雨はあがつたが、まだからツとはせぬ空模樣で、少しあるいて立ちどまると汗がタラタラと流れた。鈍い薄日が、じつに暑さうに照つて、廣い工場の庭の片隅に芥などを棄てて堆くなつたところからはむんむんするやうな熱蒸が立つてゐた。

技師の説明のとぎれた間があつた。引率して來たとはいふものの彼もまたかういふ勞働の現場ははじめてであるらしい若い教授も學生たちも默してゐた。それは何か非常に深い沈默のやうであつた。彼等の前には灼熱した眞紅の鐵のかたまりと搭闘してゐる人々の姿があつた。彼等もまた全く無言であつた。

彼らは素裸で、南京袋のやうな前掛をしてゐた。その前掛に、火花といふには餘りに大きな赤い鐵のかけ

らが時々飛びかゝつた。裸の彼らの肉體は腕や肩の筋肉こそ盛上つてゐたが、多くは肋の骨が飛び出てゐてみにくゝゆがんでゐた。胴など、びつくりするほど細いものもあつた。皮膚はよごれてゐるといふことではなしに、生地から土氣いろをしてゐた。

赤い鐵の塊は、氷倉から鉤で引き出されたばかりの氷のやうに規則正しい形をしてゐるものもあつて、その周邊は次第に青白く變りつゝあつた。それはあやしい美しさであつた。瞬時ではあるが、非常に冷たいものでもあるやうな錯覺を受けることがあつた。機械から機械の間をめぐつて次第に形を變へてゆくそれは全く一つの生きものであつた。無表情に同じ動作を繰返してゐるのであるが、それは鐵といふ生きものとの搭闘であつた。

光吉は輕い眩暈（めまい）に似たものを感じてゐた。燒けた鐵がウインチで運ばれる音の絶え間には、火熱爐の炎のぼうぼうといふ音だけが聞えるやうであつた。しかし實際には彼らはその音が聞えるやうな近さにはゐなかつた。火熱爐の口は閉ぢられてゐて、めらめら燃えてゐる炎を隙間を通して見てゐる眼は痛みを感じた。

四

「これで御覽なさい。」

ふとそばで聲がしたので光吉は振り返つた。彼はならんでゐる人々の一番左のはしに立つてゐた。言葉をかけたのはさつき技師に呼ばれた工員であつた。話しかけながら彼は手に持つてゐるものを光吉の方へ差し

のべてゐた。

それは眼鏡であつた。ニツケルぶちのその眼鏡のガラス玉は紫いろであつた。それを差しのべてよこした男の態度には、一種の率直な強さともいふべきものがあつて、光吉は引きつけられるやうな氣持で、何も訊かずに默つてそれを受け取らぬわけにはいかなかつた。

男はだまつて五足六足前の方へ歩いて行つた。そして幾つかならんでゐる爐の端の方に立つてゐる一人に向つて何か言つた。それで光吉は自分に後ろや横顔を見せたその男、——さつき技師に呼ばれて來た時には、さほど注意も拂はなかつたその男を、今度は注意して見ることができたのである。

彼は背の高い、骨組もがつしりした男であつた。歩く時にはしつかりと大股で歩いた。横顔は頰のあたりに非常に意志的な強い線があつた。頰から顎へかけてのびかけた髯が濃かつた。シャツを着てゐたが、それは着てゐるといふよりは何か布切れを引つかけたといふ感じで、胸をはだけてゐた。シャツの裾を握るとそれで胸からしたたる汗をしきりにぬぐつた。

彼はもどつて來た。するとその時光吉は眼の前がにはかに赫とはて輝きはじめたのを感じた。男に何かいはれた向ふの端にゐた仲間が、火熱爐の口を半分以上上へ押し開けたのである。爐の中はたゞ眞赤に燃えてゐるといふだけで、長く正視することの出來ぬ光りの強さであつた。

「それをかけてごらんなさい。よく見えます。」

戻つて來た男はふたゝび光吉にいつた。

光吉はいはれた通りにその色眼鏡をかけて見た。そしてたゞ眞赤なだけの爐の中の實際がどのやうなものかといふことを知つた。そこは燃えてゐるといふよりはぐらぐらと煮えたぎつてゐるのであつた。それは溫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com